

# 重点プロジェクト事業報告

## 武道課程を持つ体育大学としての社会貢献

### ～「鹿屋杯」全国高等学校選抜剣道錬成大会の開催を通じて～

前阪茂樹\*, 竹中健太郎\*, 下川美佳\*

#### I. はじめに

国立大学が法人化されて以来、大学は教育・研究のみならず、その成果を如何に、地域・社会に還元・貢献できるかということが、以前にも増して言われ続けている。あくまで一般論だが、大学における教育研究の成果とは、大学内でそれぞれの専門領域による研究や開発等を通して得られたデータや資料等を社会に公表・還元するといったようなイメージがある。しかし、大学の体育（実技）教育からみると、様々な測定や実験、調査は勿論重要であるが、それ以上に自らが汗を流して体得した専門の実技を軸にしての人材養成、つまり、その中で育った者たちが卒業後にそれぞれの道で活躍することが特に体育大学の場合の教育・研究・社会貢献の特色ではないか。つまり、実技の立場からすれば、人づくりこそが最重要であると考えている。

本稿では、大学の使命ともいえる、教育・研究・社会貢献に関して、鹿屋体育大学武道課程として、

特に剣道の立場から考える社会貢献の方向性を、「鹿屋杯」錬成大会の開催運営という面から探ってみたい。

#### II. 大会の歴史

「鹿屋杯」全国高等学校選抜剣道錬成大会（以下、鹿屋杯）は、平成16年8月に第1回大会が開催された。当時の開催プログラムの記述によれば、大会開催の目的について、

- 1) 国立大学の法人化に合わせるかたちでのスタート。
- 2) 本学の教育研究の独自性と社会貢献。
- 3) 少子化や来るべき大学全入時代に対応した広報事業。
- 4) 卒業生を含む高校指導者や高校剣道部との相互研修という「場」の提供。

など、これらを主な目的として、他大学（剣道部）と同じく、大会開催による高一大連携を図ることを意図している。

表1. 鹿屋杯大会の参加状況の変遷

	期日	場所	錬成内容	大会内容	出場校数	備考
第1回大会	平成16年8月	鹿屋市体育館、武道館	剣道講話、基本錬成、試合錬成、合同稽古	男女個人試合、男女団体試合	55校	
第2回大会	平成17年8月	鹿屋市体育館、武道館	剣道講話、基本錬成、試合錬成、合同稽古	男女個人試合、男女団体試合	61校	大学重点プロジェクト事業
第3回大会	平成18年8月	鹿屋市体育館、武道館	剣道講話、基本錬成、試合錬成、合同稽古	男女団体試合	42校	大学重点プロジェクト事業
第4回大会	平成20年9月13～14日	鹿屋体育大学武道館、鹿屋市武道館、串良平和アリーナ	合同稽古会、試合錬成	男女団体試合	68校	大学重点プロジェクト及び文部科学省後援事業

\* 鹿屋体育大学 伝統武道・スポーツ文化系

表1は、鹿屋杯大会開催の内容、参加状況の変遷である。表を見ても第1回大会からその中心的なコンセプトに見合うような内容を常に模索しながら課題としつつ、開催毎に少しずつ錬成内容を変え、その都度対応してきたこと。そして、それらに理解を得て参加校側もある程度対応していることなどが伺える。

### Ⅲ. 第4回大会の概要

過去第3回までの大会と第4回大会の大きな違いは、錬成内容とそのコンセプトにある。前大会との趣旨の違い及び国立大学法人が主催する行事の社会貢献度をより明確にするために、文部科学省に後援を依頼申請して許可を得たこと(図1)。それに加え、大会優勝チームに「文部科学大臣賞」を付与(写真1, 2)できたことである。このことは、鹿屋杯大会自体のステータスが上がったことは勿論のこと、今後、鹿屋体育大学の社会貢献事業自体のステータスアップにもつながっていくと考えられる。あとはその大会の内容がどれだけのユーザーに支持されるかどうかが課題であろう。第4回大会は、過去3回の開催・運営の様々な功

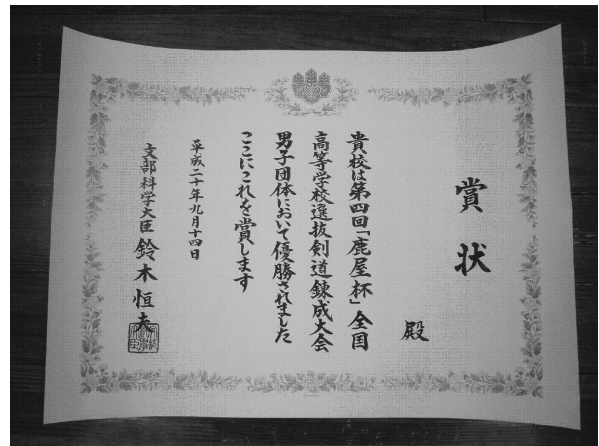


写真1

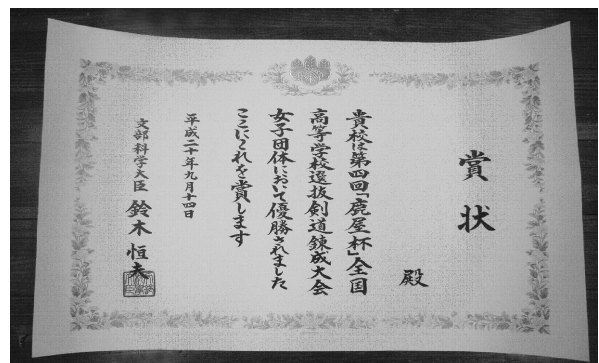


写真2

罪、反省点等を踏まえて大会期間、開催場所、錬成内容を大幅に見直した。以下にその詳細を記したい。

#### 1. 大会期間

第1回から3回大会までの開催時期は8月開催であった。これは高校側の学事日程のほとんどが3学期制であり、8月の時期は夏休み期間で日程が組みやすい利点がある。しかし実際は、高校剣道界の日程は、8月には全国高校総体(インターハイ)、国体の各ブロック予選といった公式の大会が組まれており、空いている時期はお盆の期間しかない。夏の最も暑い時期であり、当然のことながら熱中症の発症が最も懸念される時期での開催となる。実際に軽度の熱けいれんを起こした参加者が数名出たという反省からも、第4回大会の開催時期を9月開催に踏み切った。ただ、9月開催の課題は、まず、平日開催は無理なこと。概ね、新チームでの錬成時期となるため、高校間での錬

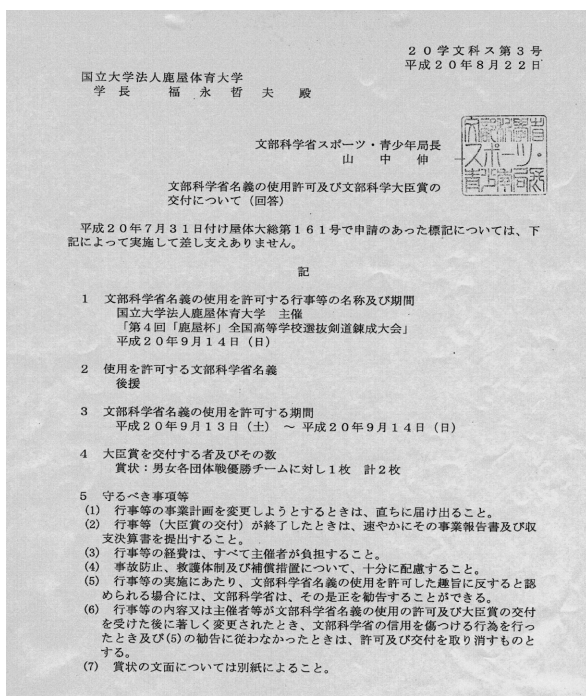


図1

成会が全国各地で多く行われており、他の錬成会との日程の重複の可能性が高いこと、高校側の行事日程（体育祭等）が多く行われていることなど、日程調整が非常に難しいことが課題となった。

## 2. 開催場所

開催場所は、3回大会までは鹿屋市体育館と武道館を使用していた。これは鹿屋市の施設を利用するということもあるが、大学内での公式大会の開催は本学の施設では収容できないことが最大の理由であった。実際に過去大会を通しての参加者の希望は「大学でやってほしい」という意見が多かった。大会の開催は無理でも大学生と高校生の合同稽古は可能であると考え、第4回大会は稽古錬成には大学の武道館で行うこととした。更に、今までの高校間で行う練習試合のニーズも考えて、試合錬成は鹿屋市武道館で行うこととした。

そして、本大会には市町村合併により新たに鹿屋市の施設となった串良平和アリーナに会場を移しての大会開催とした。

## 3. 錬成内容（大会開催報告を兼ねて…）

### （1）大会審判講習会

9月14日の鹿屋杯大会に先駆けて、大学生が高校生の試合を審判するにあたり本学剣道部内で審判研修会を9月6日に行った。（写真4、5）

特に今年4月から全国高体連で導入されることとなった、通称「つばぜり合い10秒ルール」のグ



写真 4



写真 5

ランドルールに焦点を当てて行うこととした。このグランドルールは現在高校の大会のみで導入されているものであり、主な内容は、「つばぜり合いが10秒程度続いた場合（時間空費の）反則または“分かれ”となること」や「つばぜり合いを解消する際は技を出すか間合いを切らなければならず、分かれ際に技を出せば出した側の反則となる。」など、その目的は、昨今の高校生の試合に多い、つばぜり合いに費やす時間を減らし、構え合った状態からの技を促して正しい剣道の内容に導くというものである。実際の申し合わせ導入時期は概ね今年度の高校総体の各都道府県予選からであり、まだまだ試合者、審判員ともにその対応に万全でなく成熟していない観が強い。特に、引き技の場面において、つばぜり合いからの分かれ際の打突は禁止だが、その分かれ際が「分かれようとしたところ」なのか「技を出そうとする動作」なのかの見極めが困難であり、公式の大会においてもまさに勝負の分かれ目になっていることが多い。このような高校剣道の現状も踏まえながら、「学生審判だから今のは仕方がない」といった妥協の声が聞かれることが無いように、試合における全ての事象を適正公平に判断処理でき、審判員として大会に臨む姿勢・態度を最終的に詰めて研修を行い、大会本番に備えた。

### （2）稽古錬成の部

本大会前日の9月13日（土）に、鹿屋体育大学



武道館において、参加高校生と本学剣道部員（大学生）との合同稽古錬成を開催した。詳細は以下の通りである。

#### 大学生と高校生の稽古錬成会

場 所：鹿屋体育大学武道館

時 間：14：00～16：00

錬 成 内 容：鹿屋体育大学剣道部員と鹿屋杯参加高校生との合同稽古

学生参加者：本学代表として対外試合に今年度出場した者、及び出身校が本稽古錬成に参加する者

タイムテーブル：14：00～ 諸注意, 集合, 準備運動

14：15～15：00 稽古錬成Ⅰ

15：15～16：00 稽古錬成Ⅱ

整理運動・終了

稽古について：

	剣道場（本道場）	多目的道場(サブ道場)
稽古錬成Ⅰ	元立ち：指導者, OB・OG 掛かり手：大学生, 高校生	元立ち：4・2年生 掛かり手：高校生
稽古錬成Ⅱ	同上	元立ち：3・1年生 掛かり手：高校生

\* 大学生元立ちは、常時25名（男子15、女子10名）は元に立っておくこと。

\* 先生や卒業生に掛かるときは、必ず代役を立てること。

過去3大会ともに合同稽古は開催していたが、大学でおこなうのは初めての試みであった。現在おこなわれている高校の錬成会の主流はやはり試合錬成（各高校間での練習試合）であるので、地稽古で鍛える本当の意味での「錬成」の場は現在の高校生に果たしてどこまで受け入れられるかと思ったが、稽古会は参加チーム中20校以上が参加し、指導者、高校生、保護者ら約350名以上が参加し、道場の「凜」とした空気の中で、本学剣道部員たちと共に汗を流した。

今日の剣道は競技スポーツ化が加速度的に進む中、試合以上に稽古を重んじた古き良き伝統の風潮はまだまだ剣道人の中に底流としてあるのだということが認識でき、嬉しく感じた。やはり剣道は競技スポーツ的側面を第1義とするよりも、稽

古による自己の心身の鍛錬を第1義とし、日本の伝統文化としての剣道の普及を高校指導者と共に考え、情報交換をしつつ、図っていかねばならないと感ずる。また、本稽古錬成に参加した高校生の一生懸命な稽古ぶりは、明日の錬成大会の充実した内容を十分に予感させるものであった。（写真3）



写真 3

#### （3）試合錬成の部

試合錬成の部は、高校同士の申し合わせによる練習試合である。これは、従来大会の形式を踏まえつつも、会場を鹿屋市武道館に設定して、大会主催側として全てコーディネートするのではなく、あくまで試合錬成の「場」を提供するという立場で行った。時間帯も稽古錬成とはほぼ同時時間帯であったが、参加校は6校と少なく、早めに練習試合を済ませ、移動して大学での稽古錬成に参加した学校もあった。試合錬成は、稽古錬成の部に比べて参加・活用する高校が少なかったが、後の情報では大会参加校同士で別の場所で練習試合を行っていた学校もあったということであった。来年度開催に向けて、この試合錬成についてはその方法論や開催の是非等を抜本的に見直さなければならない。

#### （4）「鹿屋杯」本大会の部

第5回「鹿屋杯」本大会は、9月14日、串良町平和アリーナで開催された。男女合わせて68校が





写真 6



写真 7

参加し、互いに鎧を削って行われた。

開会・進行については、予定通り9時より開会式を行い、大会会長挨拶（実行委員長代行）、鹿屋市長（代理）による歓迎の挨拶、審判長説示、選手宣誓、本学学生による日本剣道形演武と続いた。特に剣道形演武においては本学剣道部主将と副主将による真剣かつ学生として質の高い剣道形を披露できたと思っている。（写真6）このような姿を高等学校側に見せることも本学剣道の広報効果とも考えている。

試合は8試合場に分かれ、女子予選リーグから始まり、男子予選リーグ、男女リーグ戦終了後は、各リーグ1位・2位校が決勝トーナメントに進出し、1～4試合場で男子決勝トーナメント、5～8試合場で女子決勝トーナメントの後、それぞれ準決勝、決勝戦と区切って行なった。（写真7）

今大会の参加校には、全国レベルの高校も数校

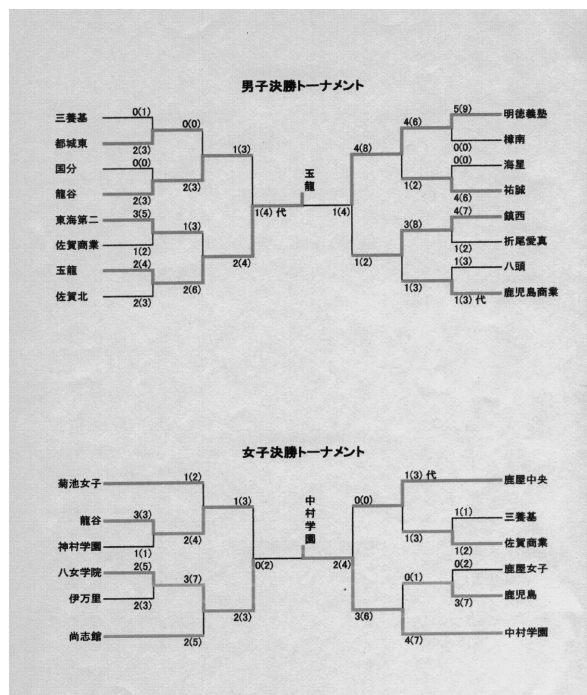


図 2

参加していた。高校剣道界では特に試合錬成による交流が盛況を極めているが、それでも鹿児島の伝統校や強豪校以外の、特に大隅半島の高校生や中学生剣道部員たちにとって、全国レベルの高校生の剣遣いを実際に観ることも剣道・武道の普及・振興と併せた地域貢献の意義があると感じる。

男子・女子決勝トーナメント出場校と大会結果は、図2の通りであった。

男子の上位進出校には全国・九州の強豪が勝ち上がってきた。準決勝には、龍谷高校（佐賀県）と玉龍高校（鹿児島県）、明徳義塾（高知県）と鎮西高校（熊本県）が進出。佐賀の龍谷は昨年のインターハイ優勝校である。明徳義塾は今年の玉竜旗大会で第3位。準決勝戦2試合は、鹿児島玉龍が龍谷を2（4）対1（3）で、明徳義塾が鎮西を4（8）対1（2）でそれぞれ制した。男子決勝戦は鹿児島玉龍と高知、明徳義塾との間で行われ、一進一退の試合内容、1対1のまま代表者戦となり、鹿児島玉龍高校が初優勝を遂げた。

女子準決勝進出校は、3連覇を狙う中村学園女子（福岡県）、地元の鹿屋中央（鹿児島県）、九州の強豪、龍谷（佐賀県）、八女学院（福岡県）の4校である。福岡の中村学園女子は昨年の玉竜旗



写真 8



写真 9

大会に優勝し、今年3月に行われた全国高校選抜でも優勝しており、どこが中村学園の牙城を崩すかというところであったが、結果は、準決勝、中村学園と鹿屋中央が3（6）対0（0）、龍谷と八女学院が1（3）対2（3）。決勝戦は、中村学園が八女学院を2対0の完封劇で大会3連覇を遂げた。（写真8、9）

#### IV. おわりにかえて～本学の武道実技教員としての想い～

教育・研究・社会貢献、この3つのキーワードは、大学の果たすべき役割を集約している。特に昨今の社会情勢のもと一般論では大学は特に研究色の強いものになっており、このことは必然且つ当然であると思う。がしかし、ここ九州最南端の地にある、鹿屋体育大学が社会から注目されるの

は、やはり学生の活躍であろう。アテネオリンピックで本学水泳部の柴田選手が金メダルを獲得した時の注目度などは計り知れない程であった。大学剣道はメディア的にはあまり派手に取り扱われないが、今までに全日本女子学生大会5連覇や男子の全日本学生2度の団体優勝や、本学卒業生達の全日本や世界剣道選手権での活躍など、鹿屋体育大学の武道課程・剣道は、全国の強豪と高校側から一応認知されているのではないと思う。そして更に大会成績だけでなく、このような主催大会の運営や本学武道課程・剣道学生の態度などを教育の成果として実際に見てもらうことで、本学の武道・剣道教育に対する理解が得られると考える。そして、全国から優秀な高校生が未来の鹿屋体育大学生となってほしいと考えている。つまり本学武道課程・剣道は表裏一体の授業と部活動で培ったチカラを対外試合やこのような主催大会錬成という場で試し、検証しながら実技実践教育の中身を深化させていく。これらの評価を受けることが、本学武道課程・剣道（部）としての社会貢献の在り方であると考えます。

終わりに、本稿が掲載される頃には、既に第5回大会を終えているであろう。執筆段階での21年度大会の参加状況は66校を数えている。少なくともこれだけの高校チームや指導者に本学の武道・剣道教育を理解してもらっていることに感謝しつつ、また、鹿屋杯大会開催準備、運営面で支援を頂いている学長はじめ大学関係者全員に対して感謝・敬意を表し、本稿を重点教育プロジェクトの報告とさせて頂きたい。

#### 資料等

1. 月刊剣道日本、スキージャーナル株式会社、第33巻第10号通巻392号、p106
2. 「鹿屋杯」全国高等学校選抜剣道錬成大会 大会プログラム 第1回～第4回